

コロナ禍といわれる状況になり、年度でいうと丸2年が過ぎようとしている。長いようだが、予定通りでもある。専門家の多くが、数年はかかるという見解だったと思う。「やっぱりそうか」という感じだろうか。人類と感染症の歴史を振り返ってみてもそうである。1、2年で終わるということはない。4月からの新年度もコロナ禍の状況は続くであろう。

今年度を振り返ってみる。秋ぐらいからだろうか。世の中の風向きが変わったように思う。一種のあきらめというか、すっかり慣れてきたように思う。

自分のことを見ても、本当にマスクをすることに慣れてきたのは秋ぐらいからである。それまでは、「あっ、マスク」と忘れることもあった。それが、忘れることなど滅多になくなった。逆に、マスクをしたまま家の中に入ってしまう「あっ、マスク」となることもあった。いつもは、車の中にマスクを置いてくるはずなのだが、お店に行っても、スタンド型の検温器に顔を近づけることにも抵抗がなくなってきた。手指消毒はしないと落ち着かない。

Zoom や GoogleMeet、Webex などのオンライン会議にも慣れた。月に何度も参加している。使ってみると、大変便利である。今のところ、トラブルによる大きな支障は起きていない。それだけ安定したシステムなのであろう。

さて、学校の教育活動はというと、令和2年度は、五里霧中の状況の中、中止、中止の連続だったように思う。今年度、令和3年度は、何とかできないか、状況はよくなるのではないかという期待のもと、検討を重ねながら、石橋をたたいて渡る、あるいは渡らないの判断が難しかったように思う。

では、次年度、令和4年度はどうするか。発想を変える必要があると思う。中止あるいは延期という考えではなく、最初からコロナ禍は続くという前提のもとに、この状況でも何ができるかという視点で考えていくのである。

例えば、本校の学校経営・運営ビジョンの中に、「地域社会に開かれた学校」というフレーズがある。この2年間は、地域社会に閉ざされた学校だった。コロナ禍なので仕方がないと、地域も学校もあきらめていたように思う。

だが、果たしてこれでいいのだろうか。この状況でもできることはあるはずである。最初からあきらめるのと、何かできないかと工夫をしていくのとでは雲泥の差である。まず「地域とともに歩む学校」にした。そして、吾妻支所の方と協議し、具体的に動き出すことにした。少しでも、生徒に地域との結び付きを感じてもらい、地域の方々に育てていただいているという思いをもってもらいたい。それが、将来、地域を支え、地域の中で生き、活躍できる人材へとつながる。

そう考えると、3年目となる令和4年度の重要性を感じずにはいられないのである。後で振り返ったときに、あの3年目がターニングポイントだったとなるように思う。